

かいたいしんしょ

#35 解体新書

作者：與般亞單闕兒武思（ヨハン・アダム・クルムス 1689-1745）

訳者：杉田玄白（すぎた・げんぱく 1733-1817）

刊行：安永3年（1774）



解題

■ 内容

『解体新書』は、日本最初の、西洋解剖書の本格的な漢訳書である。

原書は、ドイツの医学教師ヨハン・アダム・クルムス（Johann Adam Kulmus）による“Anatomische Tabellen”（通称『ターヘル・アナトミア』）を、オランダの医家ヘラルドゥス・ディクテン（Gerardus DICTEN）がオランダ語訳した“Ontleedkundige Tafelen”（1734）である。



[491. 1/5/1]

杉田玄白や前野良澤（まえの・りょうたく 1723-1803）らは、明和8年（1771）3月、千住骨ヶ原（こつがはら 現・東京都荒川区南千住2丁目、小塚原刑場跡）の刑場で行われた人体の腑分けに立ち会い、持参した『ターヘル・アナトミア』と照らし合わせてその解剖図の正確さに驚いた。同時に、それまで学んできた日本や中国の医学書の人体図に間違いが多いことに気づき、正しい知識を世に知らしめるため翻訳することを決意した。オランダ語の辞書がなく、知識も非常に乏しい状況での翻訳作業の苦勞については、玄白著『蘭学事始』（らんがくことはじめ）に詳しい。

序文と解剖図からなる序図巻1巻及び本文4巻の全5巻。木版印刷による和装本。本文の記述はすべて漢文で、原書の記述より簡略化されており、曖昧な部分が多い。一方で玄白による加筆が随所に見られる。原書に記載のある註解については全く記載されず省略されている。序図巻の解剖図21葉は、

多くは原書を模刻したものであるが、他のいくつかの西洋解剖書からも引用していることが知られている。

本書により、西洋解剖学説のあらましが初めて日本に紹介され、全国に普及した。こののち、蘭学関係の翻訳書が相次いで出版され、蘭学発展の端緒となった。

関連する書籍として、杉田玄白が『解体新書』に先立って出版した簡単な内容紹介本『解体約図』(1773)のほか、弟子の大槻玄澤(おおつき・げんたく)に命じて刊行させた『重訂解体新書』全13巻がある。

■ 作者

原著者クルムスは、ドイツの解剖学者。1722年にダンチヒで『ターヘル・アナトミア』を出版し、その後も版を重ねた。『ターヘル・アナトミア』はラテン語、オランダ語、フランス語にも翻訳された。

杉田玄白は本名翼(たすく)。『解体新書』序図巻のクルムスによる自序の末尾には「杉田翼 謹訳」とある。玄白は通称である。字は子鳳(しほう)、号は鷓斎(いさい)、晩年に九幸(きゅうこう)翁とも号した。享保末期から文化末期の蘭学医で、父は若狭国小浜藩医。私塾「天真楼」を主催し、大槻玄澤らの蘭学者を育てた。

前野良澤の名は奥付等に記載されていないが、序図巻の吉雄耕牛(永章)(よしお・こうぎゅう えいしょう)による序文や玄白著『蘭学事始』の記述によると、オランダ語の知識があったのは良澤だけであり、良澤が翻訳事業の中心的役割を務めたと考えられる。

小田野直武(おだの・なおたけ 1749-1780)は、秋田藩士で通称を武助という。平賀源内から洋画を学び、秋田蘭画と呼ばれる一派を形成した。玄白と源内は親友であり、源内の紹介によって、直武が『解体新書』の解剖図の模写を受け持ったと言われる。序図巻に直武による序文がある。

📖 本文を読む

<復刻>

『解体新書』全5巻 Johann Adam Kulmus 日本世論調査研究所 1978

[490. 21/119/1-2-0] - [490. 21/119/1-2-4]

「解体新書」(『解体新書と小田野直武』鷲尾厚著 翠揚社 1980) [721. 7/52]

※後半は小田野直武に関する研究等 序図巻は含まず

『ターヘル・アナトミアと解体新書』酒井恒著 名古屋大学出版会 1986

[491. 1/36] ※読み下し文、現代語訳もあり

<翻刻>

「解体新書原文」(『日本思想大系 65 巻 洋学 下』岩波書店 1972)

[081. 6/28/65] [ニホ/65] ※読み下し文もあり

<読み下し>

「解体新書」(『大日本思想全集 12 巻 杉田玄白集 浅田宗伯集』大日本思想全集刊行會 1934) [121/5/12] ※序図巻は含まず

大鳥蘭三郎「原文(読み下し)」(『解体新書 全現代語訳』酒井シヅ訳 講談社 1982<講談社学術文庫>) [491. 1/29] ※現代語訳もあり

<現代語訳>

『解体新書 全現代語訳』酒井シヅ訳 講談社 1982<講談社学術文庫>
[491. 1/29]

参考文献

『解体新書—蘭学をおこした人々』小川鼎三著 中央公論社 1968

<中公新書> [402. 15/14]

『解体新書の時代—江戸の翻訳文化をさぐる』杉本つとむ著 早稲田大学出版部 1987 [402. 15/45]

『前野蘭化2 (解体新書の研究)』岩崎克己著 平凡社 1996 [402. 10/12/2]

『蘭学事始』片桐一男著 講談社 2000<講談社学術文庫> [402. 1/109]

『解体新書の謎』大城孟著 ライフ・サイエンス社 2010 [491. 1/115]